

なわれ、4年間で467例に達している。ほぼ全例にシヤ式 total colonoscopy を施行しており、男性248例、女性219例、計467例、平均年齢は55歳である。内視鏡的有所見例は311例、66%であった。大腸癌42例、うち2例は早期大腸癌であった。ポリープ病変は107例であり、内視鏡的ポリペクトミーが施行できたのは68例、88病変であった。ポリープの組織学的分類は腺腫44病変、過形成ポリープ4病変、炎症性ポリープ5病変、腺腫内癌1病変であった。年齢的に癌とポリープの間には約10年の差を認め、部位はいずれもS状結腸を中心に左側結腸に多くを認めた。以上の結果を含め進行癌と大腸ポリープについて若干の考察を加え報告する。

### 7. 高齢者乳癌の検討

(外科) 渡辺 修

最近、高齢者の乳癌は増加傾向にある。そこで、当科で経験した75歳以上の高齢者乳癌について、75歳未満を対照として検討した。

その特徴は、1) 病期期間が長い、2) 腫瘍径が大きい、3) リンパ節転移率が高いが、腫瘍径の差ほど著明ではない、4) 組織型では著明な差異はない、5) 術式として縮小手術が多い、6) ER陽性率が高いなどと要約されよう。

進行した乳癌が多いにもかかわらず、年齢を考慮して縮小手術が行なわれる傾向であるが、それが予後にどのように影響するかは今後の検討課題である。

### 8. 乳腺葉状嚢胞肉腫の2例について

(埼玉協同病院外科) 長 潔

乳癌の葉状嚢胞肉腫は、特異的な臨床像と病理組織像を呈し、かなり巨大となりうる乳腺腫瘍である。大部分は良性であるが、まれに悪性化することも知られている。今回、我々は悪性葉状嚢胞肉腫の2例を経験したので報告する。症例1: 33歳女性、2年前より右乳房の腫瘤に気づき、来院時には小児頭大まで増大。定型的乳房切断術施行した。症例2: 32歳女性、16歳頃に右乳房腫瘤に気づき、来院2カ月前より腫瘤増大した。単純乳房切断術後、さらに大胸筋、小胸筋切除、腋窩リンパ節郭清を行なった。考察: 本腫瘍は線維腺腫の6%~12.5%の頻度で発生し、まれに悪性化例もある。転移は主に血行性であるが、腋窩リンパ節への転移例もあり、悪性例に対しては定型的乳房切断術か単純乳房切断+腋窩リンパ節郭清がすすめられる。

### 9. MMC 動注が著効を示した尾状葉原発性肝癌の1例

(外科) 大東 誠司

切除不能肝癌に対する抗癌剤ワンショット療法の著効例は、現在のところ極めて少ないとされている。今回我々は、尾状葉に原発しMMC大量動注が著効を示し、切除し得た肝癌の1例を経験したので報告する。

症例は62歳、男性。各種画像診断にて肝尾状葉原発性肝癌と診断されたが、CTで腫瘍が下大静脈を巻き込む所見が認められたため手術不可能と判断し、MMC 0.6mg/kg、計44mgの大量動注を行なった。その後の経過観察にて腫瘍は著明に縮小、CTでは下大静脈の巻き込み所見も消失したため、動注後2カ月後に左尾状葉切除術を施行した。術後の病理学的検索では、細胞変性、特にIcar cell degenerationが著明であったが、所々に残存する肝細胞に悪性変化は認められなかった。

### 10. 当院における閉塞性黄疸症例のまとめ—最近の治験例を中心に—

(埼玉協同病院外科) 市川 辰夫

1978年4月の開院以来1985年9月までの7年半における、閉塞性黄疸患者は63例であり、男女ほぼ同数であった。胆管癌が22例で最も多く、次いで総胆管結石症の18例であった。

経皮経肝胆道ドレナージは、この間44例に実施されており、胆管癌が22例で最も多く、次いで膵頭部癌、総胆管結石症の6例であった。超音波誘導下ドレナージ術に慣れ、最近ではほぼ全例に近い成功を納めている。

これらのうち、治療切除のなされた悪性腫瘍例は乳頭部癌の5例と膵頭部癌の1例、胆管癌の2例のみであった。

最近経験した2症例(症例1. は門脈合併膵全摘術施行の膵頭部癌例。症例2. は尾状葉合併肝左葉切除術施行の上部胆管癌例。)を供覧した。

### 11. アメーバ性肝膿瘍の1例

(埼玉協同病院外科) 佐藤 範夫

アメーバ性肝膿瘍はまれな疾患である。我々は今回、腹痛、発熱を主訴とし、諸検査の結果、アメーバ性肝膿瘍の診断をつけ、超音波誘導下ドレナージ、及びメトロニダゾール投与により完治した一例を経験したので若干の考察を加えて報告する。症例は23歳、男性、主訴は発熱、腹痛、既応歴は20歳で十二指腸潰瘍、海外渡航歴もない。職業歴は新宿のスナックのマスター、家族歴は特記すべきことはない。現病歴は1985年2月上旬、風邪症状にて某医受診、抗生物質を投与されたが軽快せず、当院紹介され入院した。入院時、心窩部